



第6回

沖永良部シンポジウム

2015年8月29日(土)・30日(日)

『エラブしてる?』を合い言葉に、8月29、30日に開催された「第6回沖永良部シンポジウム」。
 今、私たちのためにも、そして次の世代を担う子供たちのためにも考えなければならないこと、それはたった2つのことです。一つは、急激に劣化する地球環境。もう一つは、人口減少と少子化問題です。この2つの問題に、同時に答えなければなりません。それこそが持続可能(さすていなぶる)な島(あいらんど)の姿なのです。このことについて多くの有識者から貴重な提言をいただきました。一部を紹介します。



これまで右肩上がりに成長してきた私たちの社会は、技術革新があり、労働力が増え、資本の蓄積が増えてきたことにあるが、その大前提は自然資源が無限に存在することで成り立っていた。しかし、もはや右肩上がりの「経済成長」はなく、これからは自然資源の制約の中で、「心豊かに暮らすこと」、そして

これまで、人々は自然を劣化させて今の社会を作ってきた。戦後の日本では、地方から都市へ人口が移動し、経済活動も海外からの輸入に依存してきました。その結果、人々の暮らしは自然から切り離され、「森里川海」の持つ『恵みをもたらす力』が顧みられなくなり



基調講演

「地方創生を問う 依存から自立へ！ 間を埋める3つの価値軸」

一般社団法人場所文化フォーラム 名誉理事 吉澤 保幸 氏

「森里川海」のつながりが失われたことにより、荒廃した自然が増え、自然災害の規模や頻度が大きくなっています。今の悪循環の流れを変えるために、原点に立ち返り、「森里川海」の価値を見直す必要があります。私たちに恵みをもたらしている「森里川海」を国民全体で支えていくために、地方・都市を通じ国民一人一人が日々の暮らしの中で自然の恵みを意識しながら少しずつの費用を出し合い、国民・自治体をはじめ皆で「森里川海」をきめ細やかに手入れする活動を進めていく、新たな仕組みを導入することが必要です。

て、自然と共生する新たな暮らし方を考えていかなければいけません。

これからの「地方創生」の実現に向けて必要なことは、ローカルからの自立分散型社会の創造、つまり沖永良部から地方創生をすることです。

人口が減っても、生き生き湧く沸くする地域を約90年前の人と自然の関係から学び創っていく。行政の枠組みでとらえるのではなく、「字」からもう一度繋がりを見直す。そして、沖永良部の誇り(自然、食、歴史・文化、つながり等)へ5つの「か・ら」をさらに磨き上げ、百年後に伝えていくことが大切です。

基調講演

「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトについて

環境省大臣官房審議官 中井 徳太郎 氏

「森里川海」のつながりが失われたことにより、荒廃した自然が増え、自然災害の規模や頻度が大きくなっています。今の悪循環の流れを変えるために、原点に立ち返り、「森里川海」の価値を見直す必要があります。私たちに恵みをもたらしている「森里川海」を国民全体で支えていくために、地方・都市を通じ国民一人一人が日々の暮らしの中で自然の恵みを意識しながら少しずつの費用を出し合い、国民・自治体をはじめ皆で「森里川海」をきめ細やかに手入れする活動を進めていく、新たな仕組みを導入することが必要です。

見つけ出した島の5つの「か・ら」

沖永良部島の根底に流れる生活価値、これを現在の文化・文明の中にとろけかすことが出来るのか？

- ① 食
山や海から恵みの食材を頂き、豚、ヤギ、鶏を飼い、松葉やソテツを燃料に、自給自足の生活の中に多くの楽しみさえ見つけた。
- ② 自然
食も、仕事もすべてが、豊かな海、豊かな山、豊かな水の恩恵であった。
- ③ 集い
イイタバ(筵)や共同作業を基本に、自分たちで共同して冠婚葬祭から生活場までのあらゆることやものを創り上げた。
- ④ 楽しみ・遊び・学び
大人は、たしなみとして三線、歌、踊りを覚え、それが遊びであり、楽しみとなりさらには恋の醸成にも繋がった。つらい水くみや草刈りも、それを楽しむことを考え、ハレの日(先祖供養、学芸会、敬老会)は、食や芸の披露会にもなった。
- ⑤ 仕事
農業、漁業、砂糖づくり、塩づくり、運搬・・・子供にも暮らしの役割があり、一人でもいくつもの仕事をもち、仕事と生活の境界には、明確な線引きはなかった。